

## 陸軍将校教育の比較史をめぐって

— イエルク・ムート著『コマンド・カルチャー — 米独将校教育の比較文化史』

大木毅訳, 中央公論新社, 2015年を中心に —

布施将夫

### 〈Summary〉

The purpose of this article is to review and examine *Command Culture: Officer Education in the U.S. Army and the German Armed Forces, 1901-1940, and the consequences for World War II*, by Jörg Muth. Previous Studies dealing with officer education have paid little attention to the comparative history and this book is of great value in addressing this. The book is divided into three parts, in which Muth compares the way the American and German military trained their cadets and officers. Part 1 depicts the selection and appointment of officers. Part 2 discusses, “Intermediate Advanced Education and Promotion”. Part 3 is the conclusion. In Part 2, Muth compares the American Command and General Staff School with the German Kriegsakademie, but this comparison might be difficult for Japanese to understand. There was no German educational institution equivalent to the Army War College in America. Despite this possibility of perception gap, this work explores an extremely important topic about how to best train military officers. Finally, there remains the following question for Japanese readers: How about the officer education in the Japanese imperial army?

### はじめに

陸軍将校教育の研究書といえは従来、ある一国に検討対象を絞るものが多かった。たとえば、日本陸軍については広田照幸『陸軍将校の教育社会史：立身出世と天皇制』世織書房、1997年を、アメリカ陸軍についてはJames L. Morrison, Jr., “*The Best School*”: *West Point, 1833-1866*, Kent, Ohio: The Kent State University Press, 1998をあげられよう。なおこのモリソンの著作は、1986年に初めて出版され、1998年にペーパーバック版として再版されたものである。1986年に出版された際には主題が、*The Best School in the World*だと強調されていた。このように、ウェスト・ポイントの米陸軍士官学校を「世界一の学校」と位置づけたモリソンの研究ですら、他国の陸軍将校教育との比較はほとんどなされていなかった。その証拠として、モリソン研究の目次と概要を試みにあげておこう（序文は省略する）。

I. The Old Army, 1833-1860

II. The Military Academy: The External Hierarchy of Control, 1833-1854（議会や陸軍省）

III. The Men Who Governed at West Point（教師たちについて）

- IV. The Corps of Cadets: Socioeconomic Composition and the Military Environment
- V. The Corps of Cadets: Activities, Honor, and Religion (同2章分は、士官候補生について)
- VI. The Academic Environment, 1833-1854 (南北戦争に影響した授業内容)
- VII. The Military Academy in Its Educational Context (国際比較が瞥見される)
- VIII. The End of the Five-Year Course, 1854-1861 (授業内容の短期的変化)
- IX. West Point and the Civil War (陸軍士官学校と南北戦争)
- X. The End of an Era

第VII章の冒頭を希少な例外として、他国の陸軍将校教育との比較が皆無であることが一目瞭然であろう。

こうした一国史的な研究傾向のなか、本稿で主な分析対象とするイエルク・ムート著『コマンド・カルチャー——米独将校教育の比較文化史』は、比較史の視点を将校教育の研究に導入した極めて貴重なものと高く評価できよう。本書の著者ムート氏は、2015年6月20日に京都大学公共政策大学院・第1RPGルームで開催された研究会「第一次世界大戦と東アジア」に出席し、「The impact of the German officer education on the conduct of warfare in WWI」という講演を夕刻におこなった。評者(布施)も隣席した同日夜の懇親会では、日本をも含めた世界各国の軍事史や教育史の会話が花が咲いた。このように親日的なドイツ人歴史家の手になる貴重で評判も高い研究書が、日本の学界では、いまだ書評すらなされていないのである(2016年3月10日現在)<sup>1)</sup>。これは恥ずべきことではなかろうか。そこで本稿では、アメリカ陸軍や同海兵隊の将校向け選定図書にまでなった本書を紹介しつつ、批評を試みることにする。まず、本書の目次をあげておこう(中央公論新社・2015年4月刊・四六判・400頁・本体価格3,500円)。

日本語版のための序文

謝辞

序

第一章 前触れ 合衆国とドイツの軍事関係ならびに大参謀本部幻想

第一部 将校の選抜と任官

第二章 「同胞たる将校に非ず」 合衆国ウェスト・ポイント陸軍士官学校の生徒たち

第三章 「死に方を習う」 ドイツの士官学校生徒

第二部 中級教育と進級

第四章 ドクトリンの重要性と管理運営の方法

アメリカの指揮幕僚大学校と見過ごされてきた歩兵学校

## 第五章 攻撃の重要性と統率の方法 ドイツ陸軍大学校

### 第三部 結論

## 第六章 教育、文化、その帰結

### 著者あとがき

### 訳者解説

以上である。

本稿の構成もムート著の構成におおむね従おう。第1節では、本書の第一部（第三章）までを取り上げる。モリソンの著作では「世界一」と評されていたアメリカの陸軍士官学校が、ドイツのそれと比べたらどのような実態であったかが明らかになる。次に第2節では、本書の第二部（第五章）までを取り扱う。士官学校以後の米独両国の教育のあり方がここで検討され、アメリカにも無名だが優れた教育が存在したことが明かされる。その例が歩兵学校である。最後の第3節では、本書の第三部（第六章）を対象とする。陸軍将校教育の方法の優劣が、米独間の戦争の勝敗になぜ直結しなかったのかがここで考察されよう。

## 1. 将校の選抜と任官

### 1-1. 前触れ 合衆国とドイツの軍事関係ならびに大参謀本部幻想

本書第一章で評者にとって意外で興味深い点は、アメリカ南北戦争（1861-1865年）の遂行に対し、南北両軍に従軍したプロイセン（ドイツ）の観戦武官が、悪印象を受けたというところである。南北戦争での戦術は、19世紀初頭のナポレオン戦争以来のもので決定力を欠き、不要な大損害を出すものだ。重大な作戦でも素人流に遂行されている、という悪印象である。その結果、プロイセン大参謀本部の総長H・K・v・モルトケ伯爵（いわゆる大モルトケ）まで、南北戦争期の南北両軍は単に「互いを追いかけて合っている武装した暴徒」だと考えるようになる<sup>2)</sup>。

こうしたプロイセン大参謀本部は、1866年の普墺戦争、なかでも7月のケーニヒグレーツの戦いで、決定的な勝利を確かに得た。しかし著者ムートによれば、この決定的な勝利の要因は、プロイセン大参謀本部ではなく、大モルトケ個人の指揮統率と常識、および将校以下の軍人らに施された専門訓練だったのである。だがこの点をアメリカ合衆国陸軍は見誤り、決定的勝利は大参謀本部という優れた組織によるものだと判断したのであった<sup>3)</sup>。この過ちが、大参謀本部幻想と第一章のサブタイトルの末尾で表現される所以であろう。

戦場における決定的な勝利の要因には、モルトケの個人的資質だけでなく、プロイセン軍人らに施された専門訓練もあげられた。ではその専門訓練は、何のために施されていたのか。それは、本書の各所で何度も指摘される「委任戦術」(Auftragstaktik) アウフトラークスタクティーク を実現するためであった。「委任

戦術」とは、行動を詳しく指定した命令を出すのではなく、(上官の企図や)目標、および使える手段を示し、いかに実行するかは当該(下級)指揮官の判断と創意工夫にゆだねる戦法である<sup>4)</sup>。評者には、この委任戦術の採用を実現すべく将校教育を構築できたか否かが、陸軍のコマンド・カルチャーの相違を生む、と著者が強調しているように思われる。なるほど確かに、大戦間期のアメリカ軍は、常備軍保持と軍国主義化への歴史的恐怖感で縮小し、独仏の教範を翻訳してそのまま採用することでドクトリンの混乱や矛盾を招いた<sup>5)</sup>。だがこれらは、一時的現象に過ぎない。ゆえにやはり、「委任戦術」用の教育構築の可否が、米独両軍の文化的相違を生んだと強調されていると確信される。

## 1-2. 「同胞たる将校に非ず」 合衆国ウェスト・ポイント陸軍士官学校の生徒たち

本書第二章では、ウェスト・ポイントのカリキュラム等がまず概観される(73-82頁)。次に、同校における各種の「しごき」が具体的に紹介され(82-104頁)、同校の人事、つまり教官募集方法にも問題があったことが指摘される(105-112頁)。最後に、この章のまとめに該当する部分が配置されていた(114-121頁)。このように第二章は、50頁近くにおよぶ長い章だったので、少なくとも節を立てた方が良かったのではないかと評者は感じた。読者によっては、整理不足という印象を持ちかねないであろう。では、具体的な中身を検討していく。

1802年創立のウェスト・ポイント陸軍士官学校は、1900年の時点でも、授業コース全体の75パーセントをなお自然科学と工学技術に当てていた。創立時の工兵重視、数学重視の傾向が永続し、カリキュラム修正要求が出されても、従来の教育課程が「精神的規律」維持に貢献しているとして修正要求は退けられていたのである。こうした同校に入校した生徒の大多数は、各州選出の上院議員の推薦状を得ていた。このシステムは、特定の政党や派閥が、将校団を支配できないようにする「民主主義の自衛策」としては機能していたのだ<sup>6)</sup>。

しかし、ウェスト・ポイント(以下、WPと略記する)に入校したての一年生(プリーブス)には、上級生による過酷なしごきが待っていた。たとえば、ガラスの破片の上での腕立て伏せの強制や、重いレインコートを着て後頭部と壁にガラスを挟んで汗まみれのまま長時間立たされる「シャワー」は、肉体的虐待に属する。精神的な侮辱としては、無意味な情報の山の強制的暗記や狂信的な整理整頓、罰則行進などがあった。ところが、WP卒業生のなかには、「もっとも厳格な規律」のためには個人の抑圧、つまりしごきが必要だと考えるものも多かったのだ。そうしたWP卒業生から教官が募集されることが多かったため、しごきは絶えず、WPの校長や教官団は、この問題を解決するためのリーダーシップを欠き続けたのであった<sup>7)</sup>。

このようなWPの4年間の教育は、将校をめざす若者にどのようなプラスをもたらしたのか。規律の維持や将校団の同質性、肉体的な適性といった、公的ではない私的な答案が、さしあたり存在した。だがその反面、(WP自体の近代化が完全に失敗した上、)WP卒業生は実践的な軍事知識を欠いていたため、軍務をこなす実務能力をまったく持っていなかったのである<sup>8)</sup>。すなわち著者によれば、WPは、最低限の軍事知識しか伝えない時代遅れの教育システムであった。

WP に関していえば、前述のモリソンの著作とは好対照をなす低評価だと評者には思われる。

### 1-3. 「死に方を習う」 ドイツの士官学校生徒

本書第三章（122-155 頁）の前半では、ドイツの陸軍幼年学校や同士官学校の特質、なかでも WP より優れている点が紹介され、強調される。この章の後半では、出身身分により入隊過程で不公平があるドイツ陸軍の欠点が瞥見された後、本書第一部全体、つまり第二・三章のまとめがなされる（152-155 頁）。ページ数が少ない分、第二章よりは読みやすいが、やはり節立てが欲しいところであった。では、ドイツ陸軍の各学校の特質を検討していこう。

10 歳以上の少年が入校可能なドイツの陸軍幼年学校（カデッテンシュレ）は複数存在した。一方、ドイツの陸軍士官学校（ハウプトカデッテンアンシュタルト）はベルリンに1つ存在し、14 歳から 19 歳までの生徒約 1250 名を収容していた。前者の幼年学校の教官団は、WP と対照的に教育の近代化の議論に積極的に参加し、その結果、自然科学やラテン語、宗教等の授業時間は 19 世紀末から削減されていく。加えてこれら幼年学校では、いじめも上手く対処されていた。何かあれば幼年学校の生徒たちは、上級生より上位の将校に不平を訴えられたし、指導係の上級生も彼らを守ったからだ。そもそも校内の生徒隊は5つの「操行等級」で分けられていたので、下級生が上級生を年齢とは無関係に追い抜くこともあり得た。それゆえ上級生は下級生をうかつにしごけなかったのである<sup>9)</sup>。しごきの有無の点でも、米独の陸軍学校は極めて対照的であった。日本の陸軍幼年学校や士官学校がどちらのタイプに近かったのか、興味がわくところである。

こうした陸軍幼年学校・士官学校を卒業した士官候補生がさらに上級の軍学校に入る際、彼らは「人格」を判定されることになる。その際、彼ら士官候補生は、意志の力や責任意識、戦士の精神をもつべきだとされた。そしてそうした内容をもつ「人格」を示すことは、率先垂範と同じことであった。とはいえ彼らは、まだ10歳の幼年学校新入生の頃から、この信条が叩き込まれている。幼年学校の校長によって、君たちはここに「死に方を習いに来たのだ」と入学後すぐに教え込まれたからだ。そしてその後もドイツ将校は、訓練中、次のような精神を刷り込まれ続けていく。「模範であれ、戦闘中はとくに。それが死を意味するとしても」と<sup>10)</sup>。すなわちドイツ軍の教育では、最初から、最前線でリーダーシップをとる率先垂範とそこでの英雄的な死が徹底的に教え込まれたのだ。第三章のメインタイトルが「死に方を習う」であることも納得できよう。ただし評者は、こうした教育方法に、ドイツ人の悲劇好きな側面を想起せざるを得なかった。

最後に、本書第一部のまとめを確認しよう。著者ムートによればアメリカの WP は、紋切り型のプロイセン人像を追求した結果、視野が狭く、軍事的でない教育を受けた、度量に乏しい少尉を生み出しただけであった。彼らアメリカ人の将校は、ドクトリンの遵守や全員の和合、秩序等を求めるようになっていく。一方、ドイツの幼年学校では、年功序列にかかわらない生徒個人の指揮統率能力（リーダーシップ）が最高に評価された。その過程で、アメリカとは違い、しごきははっきりと禁じられることになった<sup>11)</sup>。総じて、士官候補生の教育に関する限り、アメリカの教育は徹底して批判され、ドイツの教育には肯定的な評価が下されていたと考えられる。



## 2. 中級教育と進級

### 2-1. ドクトリンの重要性と管理運営の方法

#### アメリカの指揮幕僚大学校と見過ごされてきた歩兵学校

本書第四章（159-199頁）では、章全体のなんと三分の二に該当する紙数を使って「指揮参謀学校」（Command and General Staff School, CGSS と略記）の批判が延々と続く。CGSS への批判は、WP に対する前述の批判と似た点も多い。その後、この章の最後の三分の一の紙数で、ジョージア州フォート・ベニングの歩兵学校が、アメリカの軍学校のなかでは珍しく、高く評価されることになる。

1922年にCGSSという名になる学校の原型は、1881年にカンザス州フォート・レヴンワースに設立され、名称をたびたび変えつつCGSSという名に落ち着いた。つまり教育目的が不明で、同校入学の選抜基準も朝令暮改であった。そんなCGSSは、塹壕戦を体験した第一次大戦後でも正面攻撃を主とする現実を無視した開放戦ドクトリンを奉じたうえ、そこでの講義は暗記ばかりの至極退屈なものであった。なおこの教官らも、WP同様、卒業生中心の「近親交配」の状態である<sup>12)</sup>。何の取柄もない欠点だらけの学校だと言えよう。

CGSSの教育内容には、もっと大きな欠陥が2つあった。1つ目は、屋内で図上演習ばかりさせたことである。そればかり経験した学生は、戦場の地図さえあれば必要な情報を入手できると過信するので、戦闘中、前線を視察するため司令部から外へ出ていこうとしなくなるからだ。まして実際の戦場では、そんな便利な地図など入手できないことが普通である。2つ目は、学校の決めた正解が唯一の模範解答とされたため、学生の主体性や独創性が抑制されることになったことだ。学生は、(教官ともども)主体性を喪失していたため、研究論文の執筆に必要な史料批判の訓練もまったく受けていなかった<sup>13)</sup>。もしCGSSで教育課程が終わると、引きこもりで主体性もない典型的に無能な将校ばかり生産されそうだと考えられる。

一方、WP卒業後、CGSS入学前の一階梯だと想定されていたジョージア州の歩兵学校は、様相が違った。特に、1927年末に副校長になったジョージ・C・マーシャルは、同校の教育課程を効率化し、「ドイツ化」したのだ。たとえば、教官はノートをただ単に読み上げるのではなく、語ることが求められ、問題含みの図上演習が野外演習に換えられることも多かった。そして学生にも即興の発表が求められた。つまりマーシャルは、授業の根本的な改訂を通じて、青年たちの自由な精神を育もうとしたのである。この試みを定着させるためにマーシャルは、同校における次のような服務規程を制定した。「学生が出した、[評者注：歩兵学校で]『承認された』解答とは著しく異なるが、意味のあるそれは、教室において公表する」というものである。これらの改革が進んだ彼の在職期（1932年まで）は、「ベニング・ルネサンス」と命名されたほどであった<sup>14)</sup>。WPやCGSSとは大いに異なり、学生の独創性が重んじられる、まるで一般社会の大学のような教育が施されたことが想像されよう。

## 2-2. 攻撃の重要性と統率の方法 クリークスアカデミー ドイツ陸軍大学校

本書第五章（200-238頁）では、陸軍大学校に入学するための「軍管区試験」や大学校の教官選抜等について、まず説明される（215頁まで）。次に、陸軍大学校の教育方法の工夫が具体的に紹介される（221頁まで）。そして、米独の軍事文化の違いやドイツ軍の「不服従」文化の伝統、前述の「委任戦術」について考察される（233頁まで）。ここで、非常に説得力ある魅力的な考察が展開されるが、さらなる検討の余地があるように評者には受け取れた。最後の数ページでは、本書第二部全体、つまり第四・五章のまとめが提示される（238頁まで）。

ドイツ軍の将校は、着任後5年以上を経た少尉以上のものなら皆、「軍管区試験」を受けることができ、この試験に合格すれば誰でも陸軍大学校に入学できた。ただし、公明正大な手順のこの試験に合格するには、「新鮮な発想、さりながら理路整然たる思考」が重要であった。とはいえ、陸軍大学校に入学できた青年将校たちは、その努力が大いに報われる。大学校に配属される教官は、戦争で多彩な経験をしたベテランで、かつ教育者の素質があるものだけだったからだ。たとえば彼ら青年将校は、エルヴィン・ロンメルに戦術を、ハインツ・グデーリアンに自動車輸送の実際を教わることができたのである。大学校の教官らの質が卓越していることは、ドイツの陸軍大学校に入学できた米軍将校の報告で何度も強調されたほどであった<sup>15)</sup>。

そのような陸軍大学校では、精神の柔軟性こそが重視され、「不確実性のもとで敢えて指揮統率を行え」と教育された。たとえば、「指揮官欠損」という変化が、教官に突如設定される。丸一日かけた図上演習の準備のさなかに、将校の一人が戦死したと宣言され、すべての配置を将校学生らは即興で作直さねばならなくなるのだ。ほかに、上級司令部と将校との連絡が断たれたと想定され、上級司令部の命令に従うか、自分で新たな命令を出すかを問う演習があった。演習実施前に与えられた膨大な量の情報の真偽を判定し、決断する訓練も見られた。すなわち、ドイツの陸軍大学校では、前述のアメリカのCGSSとは対照的に、学校が決めた正解はないのである<sup>16)</sup>。こうした戦場の不確実性、不意打ちの要素にも即興で対応することを求めたドイツの軍学校の教育方法を、アメリカでは歩兵学校が例外的に採用したのであった<sup>17)</sup>。

ではなぜ、ドイツの陸軍大学校では即興性や自主性が重んじられたのに、アメリカのCGSSでは学校の決めた正解に従うことを強制されたのか。その背景として、米独の軍事文化の違いが次のように指摘される。ドイツの軍事文化では、青年将校は、たとえ下級でもすでに高い尊敬を勝ち得ていた。彼らは国民に仰ぎみられるドイツ将校団の一員だからだ。それゆえ彼らは、上官が死傷した場合、上官にかわりすぐに指揮をとる重要な立場にあった。普段の演習から彼ら下級将校の見解は尊重され、上官への反論が大目に見られるどころか、時には奨励までされた。一方アメリカの軍事文化では、下級将校は欠点のみ批判され、しごかれる存在であった。ゆえに彼ら青年将校は、ある程度活躍できる大規模な演習や戦時以外には、自主性が抑制されたのである<sup>18)</sup>。

このようなドイツ特有の軍事文化を生んだのは、プロイセンの将校団がもっていた「不服従」という文化的伝統だったとされる。有名なフリードリヒ大王でさえ、部下の不服従に何度も耐えねばならなかった事例は非常に興味深い。そうした歴史上の諸事例の結果、ドイツ軍では、「内

密裡に指揮する」(führen unter der Hand. 司令官の背に隠れて指揮統率する)という文言が出現した。「不服従」の文化伝統やこの文言から、「上官による方針指示はあるものの、けっして事細かな統制はやらない」委任戦術という前述の概念が発想されるのも至極納得できる<sup>19)</sup>。ただし、評者はここで二点だけ問題提起したい。まず、ドイツ将校団を仰ぎみるほどの国民の過剰な尊崇心が、その後のドイツにおける文民統制(civilian control)を難しくしたのではないか、という点である。もう一つは、ドイツ軍の影響を受けた日本陸軍が、委任戦術に少なくとも憧れ、将校団のなかの「下剋上」を誘発する結果になったのではないか、ということだ。以上である。

本書第二部のまとめを確認しよう。著者ムートは、米独の中級教育を一文で簡潔にこう比較している。「CGSSが「平均的な」将校に何かを会得させるための中学校とみなし得るとすれば、ドイツ陸軍大学校はエリート大学の博士課程におけるゼミナールに似ている」と。その結果、陸軍大学校を卒業したドイツの将校は、優れた戦術家になっていた。ただしアメリカの場合、陸軍大学校(AWC、注記13番参照)の相当アカデミックな雰囲気の中、大規模な部隊の運用が教えられ、将官への道が準備されていたとされる。またアメリカの軍産業大学校(注記13番参照)に将校が入学すれば、彼は、工業界と密接なつながりを持つことができた<sup>20)</sup>。

以上のようなまとめに対し、評者は一言付言したい。本書第二部は「中級教育と進級」というテーマであった。だとすれば、米独の教育機関で相互に比較すべき学校は、アメリカのCGSSとドイツの陸軍士官学校だと誤解されないだろうか。評者が著者にEメールで確認したところ、真相は次のとおりであった。アメリカの軍学校の教育段階は、WPからCGSSを経て、AWCに至る。一方、ドイツのそれは、陸軍幼年学校と同士官学校(ギムナジウムのように)初期の教育段階を形成し、陸軍大学校が中級教育を担う、と。つまりドイツには、アメリカのAWCに相当する教育段階がなかったのである。本書でアメリカのCGSSとドイツの陸軍大学校を比較した理由について、このような説明があれば、読者の誤読を完全に防げたと思われる。

### 3. 結論 教育、文化、その帰結

本書第六章(241-281頁)は本書全体の結論であるため、ここまでの議論を再確認しながら、米独両軍の教育や文化、その帰結を提示している。ただし以下では重複を避け、ここまでの議論は再確認しない。また第六章の末尾(274-280頁)では、21世紀初頭の「イラクの自由」作戦が現代の例としてあげられ、興味深いエピソードもあった。しかしながら本書の原作のタイトルは、*Command Culture: Officer Education in the U.S. Army and the German Armed Forces and [the Consequences for World War II]*(カギカッコは評者による)である。それゆえここで紹介する米独両軍の教育や文化の帰結も、第二次世界大戦までに限定したい。つまり、現代のイラク戦争におけるエピソードは省略する。

米独両軍の教育は、両国の一般社会の特徴と対比しつつ、次のように簡潔に比較されている。すなわちドイツの若者は、きわめて権威主義的な社会で成長しながら、「リベラル」とさえいえ



る専門軍事教育を受けていた。すでに幼年学校の段階で、処罰ではなく褒章という手段が用いられたのである。一方アメリカの若者は、(白人にとって)世界一自由な社会で育ちながら、きわめて苛酷で狭量な軍事教育システムに服すことになった。士官学校(WP)がその典型である<sup>21)</sup>。このように米独両国は、一般社会が非常に対照的である上、軍事教育もまったく対照的であるという一種のねじれの関係にあったものとして考察される。

米独両国における軍事文化はこう対比される。ドイツでは、将校団に属すことは大いなる名誉であった。ゆえに尉官クラスの俸給は伝統的に少なかったが、彼らの社会的義務は米軍将校よりずっと大きかったのである。一方アメリカ社会は、正規軍を歴史的に恐れ、その存在を無視することさえあった。エリート層より一般大衆のなかでその嫌悪感は特にひどく、レストランや宿屋に軍人の立ち入りが許されない地方があったほどである<sup>22)</sup>。一般社会における軍事文化、ひいては軍人と民間人の関係でも、米独両国はきわめて対照的なものとして示されていた。

以上のような米独両国における軍事教育や軍事文化の結果、第二次大戦期までに何がもたらされたのだろうか。軍事に関する限り、教育と文化の両面でドイツがアメリカより優れていたはずだが、両大戦の結果、ドイツはアメリカに敗北した。これは一体なぜなのか。この大きな問題を解く手がかりとして、本書は3つの問いを設定し、それらに答えていく。

まず、アメリカ陸軍の教育システムは前述のように欠陥だらけだったのに、なぜ、大胆で有能で攻撃精神にみちた指揮官が出てきたのか。この問いへの答えはこうである。米陸軍の傑出した将校は、軍事史を含むあらゆる種類の書物を大量に読破し、実質的には自発的に自己鍛錬したのだと。卓越した将校の例として、マシュー・B・リッジウェイ、ジョージ・C・マーシャル、ドワイト・D・アイゼンハワー、ジョージ・S・パットンらの名前が列挙される<sup>23)</sup>。生まれつき素質のある将校らは拙い教育に頼らずとも、自力で才能を開花させられたとは、現代の心理学や教育学における nature-nurture problem (素質・環境問題) を考えさせる好例であろう。

次に、ドイツ軍の教育は米軍の教育より成功し、ドイツ軍の将校団は「不服従」の文化的伝統をプロイセンから引きついだのに、彼らはなぜ、絶滅戦争を遂行中の不法なナチ体制に協力したのか。この問いへの答えは2つ提示される。まず、ドイツ軍の下級将校は、戦場では状況が常に変化するので、どんな戦争でも新しい手段をもってする新しい戦争だと教えられてきた。ゆえに彼らは、東部戦線における戦争の野蛮化にも容易に順応したとされている。もう1つの答えは、上級将校や高位の軍人が、俸給の倍以上の特別給与を報酬だと思いつつヒトラーから受け取ったため、彼らはナチ体制に実質上買収されていたとするものだ<sup>24)</sup>。犯罪的な後者の解はさておき、前者は、ドイツ軍の将校教育が成功したからこそ生じた皮肉な結果だと考えられる。

最後に、ドイツ将校団(ヴェアマハト)の主な敗因には、ほかに何があったのかが問われる。その答えも2種類あげられる。まず、ヴェアマハトは名声高い集団で国内外から称賛され続けてきたので、際限のない傲慢さに陥り、敵軍を常に過小評価することになったのだと説かれた。もう1つはもっと根源的な答えである。ドイツ軍の少将以下の将校らが戦術上いかに優秀でも、彼らをあやつる頭脳、つまり優れた戦略司令がいなければ、どれだけ多くの戦闘には勝てても、

戦争には勝てない。つまりドイツ軍の場合、戦術より高度な戦略をたてるべき高位の将官の選抜に欠陥があったので、敗戦したと説かれる<sup>25)</sup>。確かにドイツの軍学校は、戦術教育の点では非常に優れていたが、戦略教育がおろそかになっていたのではないかと評者も感じた。この戦略教育という唯一の点で、アメリカの陸軍大学校（AWC）がドイツの各種の軍学校を凌駕していたのではなかろうか。

## おわりに

以上のように本稿では、イエルク・ムート著『コマンド・カルチャー』の概要を紹介し、批評しつつ、陸軍将校教育の比較史を検討してきた。本書の内容を逐一繰り返すことはここでは避けるが、陸軍将校教育のどの段階を見ても、ドイツの教育がアメリカのそれに優っていたと認められよう。唯一、アメリカの陸軍大学校（AWC）の教育の詳細がブラックボックスとされたため、戦術上劣っていた米軍の将校教育をどこまで補足できたのか、戦略教育は実施されたのかという関心が残る程度である。その他の批評ポイント、本書第一部の各章は節立てすべきだとか、第二部における比較対象を選んだ理由について説明がもう少し欲しかったなどといった点は、執筆上の技術的な問題にすぎない。したがって本書は、将校教育の比較史という新しい研究分野を開拓したバイオニア的労作だと極めて高く評価できよう。

本書の魅力はそれだけではない。評者が論評の手がかりとしたのは本書の邦訳だが、読書中、訳書であるということをはほとんど忘れるほど、こなれた訳述がなされていた。訳者の大木毅氏の力量に頭が下がるばかりである。また、ほかでは見られないような貴重な写真が数多く掲載されており、読者の興味をいちじるしくそそる。それでいて、主要参考文献や註、索引をあわせると（全400頁中）100頁以上になるので、学問上も信頼して読み進めることができた。つまり本書は、しっかりとした根拠に裏付けられた魅力的な読み物としても楽しむことができるのだ。

では、われわれ日本人読者に残された課題は何であろうか。本書で開拓された陸軍将校教育の比較史に日本陸軍の将校教育史を付け加え、この分野の研究をいっそう推し進めることであろう。そのためには、本稿冒頭で触れた広田照幸の『陸軍将校の教育社会史：立身出世と天皇制』世織書房、1997年が最初の良き指針の1つになると考えられる。また最近の研究書としては、山田朗『近代日本軍事力の研究』校倉書房、2015年があげられる。同書の第二部第二章で「近代日本における参謀養成の特徴」が検討され、日本陸軍は、現実ばなれした「議論の勇者」を育成しがちであったと論じられているからだ。ともあれ、今後の研究の進展が望まれるところである。

## 註

- 1) ただし、Web上では本書の紹介がいくつかなされている。アマゾンのカスタマー・レビューがその例である ([http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4120047261/ref=cm\\_cr\\_dp\\_see\\_all\\_btm?ie=UTF8&showViewpoints=1&sortBy=recent](http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4120047261/ref=cm_cr_dp_see_all_btm?ie=UTF8&showViewpoints=1&sortBy=recent) 2016年2月6日アクセス)。とはいえこ

- うしたレビューでは、本書が、ムート氏の「修士論文を基に書かれたものだそう」といった誤りも見られる。本書は、ムート氏の博士学位論文が基になったものだ。イェルク・ムート著『コマンド・カルチャー——米独将校教育の比較文化史』大木毅訳、中央公論新社、2015年、9頁参照。
- 2) 同上、37頁。アメリカにも、南北戦争期の戦術を、不要な大損害を出す点で「非効率」だと見なす将校は確かに現れた。ムートも言及したエモリー・アプトンがその例である。しかし南北戦争中の鉄道の軍事利用状況が教訓として学ばれ、プロイセン大参謀本部内に「鉄道課」を設立させることにもなった。拙稿「エリヒュー・ルートの軍制改革——陸軍省参謀部の創設をめぐって」『アメリカ史のフロンティアII 現代アメリカの政治文化と世界——20世紀初頭から現代まで』肥後本芳男・山澄亨・小野沢透編、昭和堂、2010年、7頁、および拙著『補給戦と合衆国』松籟社、2014年、64頁参照。
  - 3) ムート、前掲書、39-40頁。
  - 4) 同上、44-45頁。この戦術には、「訓令戦法」という訳語もある。ちなみに同上、4頁によれば、19世紀のドイツ人顧問も、委任戦術の発想を、日本軍の将校に伝えられなかったとある。だがこの見解には、再検討の余地があるように思われる。
  - 5) 同上、58-60頁。
  - 6) 同上、75、80頁。
  - 7) 同上、86-87、98、100-103、110頁。なお同上、85頁によると、WPには、直立不動の姿勢を取らされる「矯正具」と呼ばれたしごきも存在した。一方、同じ20世紀初めに、アメリカ海軍のアナポリス海軍兵学校では、「ランニング」と呼ばれたいじめが存在した。これは、上級生が下級生に気をつけの姿勢で立たせ、さまざまな質問をし続けるというWPの「矯正具」とよく似たものである。「ランニング」はいじめゆえ、厳罰の対象であったが、なかなか発覚しなかった。いじめの伝統ですら、喜んで通過すべき「男らしさ (manliness)」の試練だと下級生からも支持されていたからである。いじめに従わないのは、むしろ「子供じみている (babyish)」とさえ考えられていた。U.S. Congress, H.R. Committee on Naval Affairs, *Hazing at U.S. Naval Academy hearings before the United States House Committee on Naval Affairs, Sixty-Sixth Congress, second session, on Oct. 14. 1919*, Washington: U.S.G.P.O., 1919, pp. 4-7 参照。ちなみに hazing は、「いじめ」とも「しごき」とも訳しうる単語である。
  - 8) ムート、前掲書、115-118、121頁。なおWPでは、おおむね17歳以上22歳以下の若者が受け入れられる。同上、30頁参照。
  - 9) 同上、30、126-127、130、134頁。なお、評者の母校である鹿児島ラ・サール中学校・高等学校は、生徒の年齢層や規模の点で、ドイツの陸軍士官学校とよく似ていた。ただ、数学偏重という点では、評者の母校はアメリカのウェスト・ポイント陸軍士官学校に酷似していた。
  - 10) 同上、136-139頁。アメリカ軍は、この最前線でのリーダーシップを見逃したとされる。
  - 11) 同上、152、154頁。
  - 12) 同上、159、163-164、170、172-174頁。
  - 13) 同上、178-182頁。CGSSの次の上級学校としては、陸軍大学校 (Army War College, AWC) や軍産業大学校 (1924年創設) などが存在した。これら2つの大学校に対しては、大戦間期に訪米したドイツ将校が関心をもって高く評価した。同上、168、186頁参照。なお、前者のAWCの設立経緯に関しては、拙著『補給戦と合衆国』158頁参照。
  - 14) ムート、前掲書、187-188、190-191、197頁。ドイツ軍の戦争経験者アドルフ・フォン・シエル大尉は、将校学生として歩兵学校にやってきたが、すぐに教官として遇されることになった。柔軟な待遇改善だと言えよう。
  - 15) 同上、202-204、214-215、234頁。
  - 16) 同上、219-221頁。ほかにも将校学生が服す「兵科指導」があった。異なる兵科について知る

もので、たとえば歩兵将校が砲兵隊を、騎兵将校が歩兵隊を指揮することになった。

- 17) 同上, 196 頁。
- 18) 同上, 221-222 頁。
- 19) 同上, 223, 225-226, 228, 230-231 頁。
- 20) 同上, 236-237 頁。
- 21) 同上, 243 頁。
- 22) 同上, 60, 221, 264 頁。一般社会と陸軍との地理的・心理的へだたりのため、アメリカ社会では19世紀前半の時点ですでに、軍への無関心や反軍感情が生まれていた。James L. Morrison, Jr., *"The Best School": West Point, 1833-1866*, Kent, Ohio: The Kent State University Press, 1998, p. 18 参照。後年有名になるユリシーズ・グラント将軍が、新任の中尉の時、シンシナティの少年にあざけられる挿話がこのこであげられる。「兵士だって！いつか働くのかい？いいや働かないね。僕の方が先にシャツを売ることになるさ！」と。
- 23) ムート, 前掲書, 268 頁。
- 24) 同上, 268-270 頁。
- 25) 同上, 271-273 頁。将軍になるには、日和見主義やへつらい能力、コネが重要だった。

付記1：本研究は、平成26～28年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「体罰の比較文化史研究——暴力なきスポーツ界の思想的基盤構築に向けて」(研究代表者：石井昌幸, 研究課題番号26282179)の助成を受けておこなわれたものである。

付記2：なお、本稿で主にとりあげた書物『コマンド・カルチャー』の原著者イエルク・ムート氏に対し、評者布施は、Eメールで疑問点を何度も問い合わせ、丁寧な返答を得ることができた。加えて、〈Summary〉のチェックもムート氏にお願いすることができた。記して謝意を表したい。